

シンポジウム企画趣旨

森 茂起

森です。よろしくお願ひいたします。本日は人間科学研究所の企画で戦争体験を扱うシンポジウムを企画しましたところ、多数参加いただきましたが、ありがとうございます。いま学長からご挨拶いただきましたが、通常このようなシンポジウムのはじめに学長にご挨拶いただくと形式的なご挨拶になる場合が多いのですが、学長ご自身の背景に戦争体験が深く関わっていることもあり、今日はシンポジウムの内容に深くかかわるお話もいただきました。後の議論で扱いたいような、われわれ自身が問題としたいテーマが多数含まれていたと思います。

それでは、各発表に入ります前に、私から全体の構成などを説明させていただきます。甲南大学の研究所では、「子ども時代の戦争体験」というタイトルで現在研究調査を進めており、本日のシンポジウムは、その一環として行なわれるものです。

本研究は、もともとドイツから提案があったことに発しています。子ども時代の戦争体験を調査研究する同趣旨の企画がドイツのミュンヘン大学を中心に数年前から行われており、

その研究チームから、兵庫県こころのケアセンターに、「日本でも同様の研究をして、比較研究しないか」という提案がありました。こころのケアセンターは、阪神・淡路大震災を機に設立されたのですが、戦争というテーマを研究プロジェクトに持つておりません。そこで当時所長であり、甲南大学の教授も務められた中井久夫先生から、私どもの研究所に「共同研究という形でやらないか。むしろ甲南の研究所が主体となってやってもらえないか」と話が回ってきたことが始まりです。

準備期間を経て、二〇〇七年夏からようやく調査を開始することができました。アンケート調査から始めまして、二〇〇八年冬に一〇名の方にインタビューを行いました。二〇〇八年の三月で第二期のプロジェクトが終わりましたので、その最後の時期になります。この時期にインタビューに参加してくださった方は本日の会場にも来ておられると思います。

前期までの研究をさらに継続し、戦争体験調査をいっそう拡大するため、文科省の私立大学戦略的研究基盤形成支援事業に応募しました。それに採択されて、文科省の助成を得ながら研究を進めていく体制ができたのが二〇〇八年から二〇〇九年の、昨年度で、インタビューの継続よりも、申請から採択にいたる業務に時間を費やしました。採択により、二〇一三年度までこの研究を続けることができることになり、今年の夏から新たな段階のインタビューやアンケートを行なっているとところです。現在に至る流れはおよそのようになります。

っています。

第二次世界大戦に関しては、戦後期から現在までに、既に膨大な文献、記録が存在します。戦争を扱った小説、自伝的な作品に含まれるもの、新聞等の記事や学術的な論文やメディアを通して情報など、多数存在します。しかし、それでは戦争についてすでに語り尽くされていて、新たに付け加えるものはないかと問うと、答えは当然ノーであります。この問いに対してイエスと答える方はほとんどないと思います。まだまだ語られていないものはありますし、そもそも今までどこまでが語られてきて、何が残っているのかすら見えない。ある部分については多数語られているけれど、他の体験については語られていないという事態もあります。全体として戦争体験にはどのようなものがあり、その中でどこまでが語られてきたかすら十分見えていないのが現状ではないかと思えます。

私は心理学を専門にしておりますが、心理学で戦争に関する研究となりますと、さらに貧しい状況で、実際のところ研究がほとんどされていないと言ってもいいでしょう。個人的に取り組まれた方がぼつぼつある程度で、学問全体として扱ったことはありませんし、今現在でも状況は変わりません。私の研究主題であります、トラウマ学の中で戦争は重大なテーマのはずですが、その中に絞っても戦争を扱った研究はほとんどないのが現状です。むしろ避けてきたと言ってもいいと考えています。

そのような現状を背景として、とにかく戦争を扱った調査

研究が必要である、一つの研究主題として立ち上げ、学会で議論できる形にしていかなければならないという認識が、私たちの出発点となっています。スライドに示しておりますように、研究には大きく四つの柱があります。心理学的研究の部分は、私がこれから紹介しなければならぬ部分です。歴史学的研究が別分野としてあります。「和解と許し」に関する研究は、本日は詳しく触れられませんが、プロジェクト全体にとって非常に重要なテーマです。それから、子どもが受けるトラウマに関する治療実践も現在行なっています。これについても、今日は直接触れられませんが、今現在の子どもたちが受けているさまざまな被害の結果に対し、どう援助し治療していくかを考えています。

直接調査に携わっているメンバー、および他のテーマに関わっているメンバーのリストがありますが、詳しく紹介する時間がありませんので割愛させていただきます。

以上のような経緯で研究を進めているわけですが、本日は、中間地点にいたった段階で、さまざまな立場からわれわれの研究についてご意見をいただいたり、議論したりすることで今後の進展の足掛かりとしようと考えました。

今日のシンポジウムの構成を申し上げます。今お話ししています前置きに続きまして、私から心理学的な調査の現状をお話しします。そのあと、甲南大学で日本史を研究されている東谷智さんから、疎開児童の研究についてお話をいただきます。東谷さんは、もともとは江戸時代を専門とする歴史研究家ですが、この研究事業を一つのきっかけにしまして、戦争

というテーマについても今非常に熱心に取り組まれておられます。詳しくは後ほどのご発表の中でお話しになると思います。この二つが、神戸、阪神地域の戦争体験を調査する研究です。もう一人、シンポジストとして中田政子さんにお話しいただきます。中田政子さんは「神戸空襲を記録する会」の代表として、神戸空襲を体験された方々のお話を記録していく市民活動に携わってこられた方です。市民団体の活動による記録という私どもとは異なった立場からのお話をぜひうかがって、立体的に戦争体験をとらえる試みをしたと考えています。

三人それぞれの立場で神戸の戦争体験を記録してきた経歴を語った後、休憩をいただきまして、その後専門がそれぞれ異なる三人の方々に指定討論者としてご意見を伺います。その方々もあらかじめ紹介しておきます。指定討論者の一人目が中尾知代さん、岡山大学の准教授をなさっておられます。オーラルヒストリーという、言葉で語られた歴史を専門にされている方です。日本あるいはイギリス、オランダ等の戦争体験の聞き取り研究を長く続けてこられました。お仕事の内容についてはお話の中でも触れられるかと思いますが、子どもたちの疎開体験をイギリスでどう記録し扱っているかにも触れられると思います。

次の指定討論者として、野上元さんをお願いします。野上さんは歴史社会学という立場から、日本の戦争体験が今までどのように語られてきたか、どのように記録されてきたかを丹念にたどり、分析されている方です。野上さんから、わ

れわれの研究へのコメントをいただきたいと思っております。

三人目としまして、松本泉さん。松本さんは毎日新聞の記者を務めておられまして、その中で数多くの戦争体験者のインタビューを行ない、記事を書かれてきた経歴がある方です。新聞というジャーナリズムの中で戦争体験を記録し伝えるお仕事は、戦争体験の記録として重要な分野です。その立場からのご経験を語っていただき、われわれへのコメントもいただきたいと考えております。

以上のような構成で、これから進めてまいります。長時間にわたりますが、最後までお付き合いいただきたいと思えます。今日お見えの方の中にも、ご自身で戦争体験をお持ちの方々が多数来られていると思います。ご自身の体験とも重ねながら聞いていただければと思います。